

第73回国際理解・国際協力・多文化共生のための高校生の主張コンクール東京都大会 金賞

学習院高等科 1年

石黒 巧

課題 ②

今年は新たな国連事務総長が選出されるが、もしあなたが次期国連事務総長に選ばれたら国連をどのような組織にしたいか。

副題

世界と私の距離をゼロにする国連

本文

課題② 世界と私の距離をゼロにする国連

「このツナの袋を、箱に入れてください。」

今年の夏、僕はアメリカ・ロサンゼルススのフードバンクでボランティアをした。倉庫には支援物資が並び、次々と運ばれてくる食品を仕分け、段ボール箱に詰めていく。作業自体は難しくない。しかし、詰めた箱を見ながら、ふと手が止まった。この箱の向こうには、今日食べるものに困り、支援を待っている人がいる。それまでニュースや教科書の中にあった「貧困」や「飢餓」が、初めて自分の手の届くところにある問題になった。

もし僕が次期国連事務総長に選ばれたら、国連を「世界と一人ひとりの距離をゼロにする組織」にしたい。それまでの僕にとって、国連とは遠い存在だった。大きな会議場で各国の代表が議論し、戦争、難民、気候変動といった巨大な問題を扱う場所。高校生の自分にできることなどないと思っていた。

しかし、フードバンクで一袋のツナを箱に入れたとき、その考えが変わった。世界規模の課題の先にはいるのは、一人ひとりの人間だ。ならば、一袋の食品を届けることも、世界を少し良くする行動の一つではないか。世界を変える力は、特別な立場の人だけのものではない。

日本でも、それを実感した経験がある。僕は東京都港区の取り組みで、自分たちが考えた地域の課題と解決策を、区長や教育委員会、区議会議員の方々の前で発表した。高校生の意見が本当に社会に届くのかという不安もあった。しかし、僕たちの提案の一つが、港区のコミュニティバス「ちいばす」での発信として前向きに検討されることになった。そのとき僕は、「社会を動かす人」と「動かされる人」が最初から決まっているわけではないと気づいた。高校生でも、現場を見て考え、声を上げれば、社会を少し動かすことができる。だから僕が事務総長なら、国連を各国政府だけが議論する場所から、世界中の市民、特に若者が参加できる場所へ変えたい。

例えば、各国の中高生が地域で見つけた課題と解決策を国連に直接提案できる「ユース・アクション・ネットワーク」をつくる。意見を集めるだけではなく、選ばれた若者が国連の会議に参加し、各国の代表と直接意見を交わす。そして、優れた提案には国連が自治体や企業と協力して実現を

支援する。若者を「未来を任される人」ではなく、「今の社会をつくる一員」にしたい。

なぜ、それを国連がする必要があるのか。それは、一つの国だけでは解決できない問題が数多くあるからだ。貧困も気候変動も感染症も、国境で区切ることはできない。一方で、その解決への一歩は、一人の行動から始まることがある。

だからこそ国連には、各地で生まれた小さな行動を国境を越えてつなぐ役割がある。東京の高校生が考えたアイデアが海外の若者の活動につながり、ロサンゼルスで僕が学んだことを日本で生かす。国連がそんな「行動の橋」になれば、世界の問題はもっと自分たちに近いものになる。

もちろん、若者の声だけですべての問題を解決できるとは思わない。国によって歴史も文化も立場も違う。それでも、国境や世代を超えて同じ問題について考え、互いの声を聞くことは、分断を小さくする一歩になるはずだ。

ロサンゼルスで僕が箱に入れた一袋のツナは、世界全体から見れば、とても小さなものだ。しかし、その一袋を必要としている誰かがいる。

世界を変える第一歩は、巨大なことを成し遂げるのではなく、「自分には関係ない」と背を向けないことなのだと思う。

僕がつくりたい国連は、遠くから世界を動かす組織ではない。世界中の一人ひとりに「あなたにもできることがある」と伝え、小さな行動を国境を越えてつなぐ組織だ。

世界と私たちの距離がゼロになったとき、国連は「遠い誰かの組織」ではなく、「私たち一人ひとりの組織」になる。僕は、そんな国連をつくりたい。